
ワンナイト = ジゴロ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンナイトリジゴロ

【Nコード】

N0044B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

洒落た都会のバーで一人飲んでいると話し掛ける魅惑的な美女が。彼女と飲みそのまま一夜を過ごす。それは夢か幻か。チェッカーズシリーズ第十二弾です。中期シングルの名曲です。

第一章

ワンナイト＝ジゴロ

銀座の洒落たバー。カウンターには洒落たステンドグラスがある。そこには酒とグラスが並んで置かれている。俺はそこで聴き飽きた古いジャズを聴きながらカウンターに座っていた。

その横には誰もいない。俺は一人で飲んでいた。たまには一人もいいものだと思いつながら飲んでいた。

店には俺の他にはバーテンしかない。そのバーテンにカクテルを作らせながら飲んでいる。ふと飲むのを止めて煙草を取り出した。それに火を点けて吸う。

煙を吐く。白い煙だった。それが煙草の青い煙と混ざり合う。そしてその向こうにある洋式ぶつたステンドグラスを曇らせる。もつとはつきり言えば俺の前にあるステンドグラスを霧みたいに遮った。軽く吸ってその煙草を灰皿に置く。それから手をグラスに戻した。「隣いいかしら」

不意に声が聞こえてきた。どうやら俺らしい。

「誰だい？」

声からそれが女のものだとわかる。声の主らしき女は俺に答えるより早く俺の隣に来ていた。

「暇を持て余しているのよ」

耳元で俺に囁いてきた。見れば大人の熟れた女だった。

歳は二十代後半、若しくは三十代前半といったところか。黒い髪を長く垂らしている。

顔は白く化粧され紅のルージュがひかれている。眉は黒く長く描かれ、それが二重の目によくあっていた。黒い翡翠の様な目はもう濡れていた。

そして赤いドレスを身に纏っている。胸も背中も大きく開いていた。

足にはスリットが。派手に映えている。その白い足は付け根まで見えていた。あやうくそちらに目を奪われてしまう。

「暇をねえ」

俺はそれを聞きシニカルに笑った。

「それで俺を相手に暇を潰そうと」

「そうよ」

女は笑って答えた。

「貴方も暇なんですよ。いいじゃない」

「まあね」

俺はそれを認めた。

「だからここにいるしね」

「お酒を楽しむ為じゃなくて」

「いや、酒は楽しいよ」

本当はそうじゃない。だがあえてこう返した。

「飲んでいると嫌なことを忘れられる」

「気軽ね」

女はそれを聞いてくすりと笑った。

「残念だけれど私はそうはいかないわ」

「じゃあどうしているんだい？」

「その時によって様々ね」

女はそう言って俺の隣の席に座った。

「空いているとはまだ言ってなかったけれど」

「まだね」

「そう、まだ」

俺は返した。

「じゃあ今言ってくれるかしら」

「わかったよ」

俺はグラスを置き女に顔を向けて応えた。

「空いているよ。どうぞ」

「有り難う。それじゃあ」

女はバーテンに声をかけた。

「アドニスⅡカクテルを」

「面白いのを頼んだね」

俺はそのカクテルを聞いて言った。カクテルにはそれなりに知識があるつもりだ。だからこの店にも来ている。

「好きなのよ」

女はそれを聞いて言葉を返してきた。

「アドニスが」

ギリシア神話の美少年の名前をつけたらしい。そっちには詳しくはないがシェリーと甘いイタリアンⅡベルモットの組み合わせはこつた夜の店に合っている。今飲んでいるのを飲み終えた俺もそれを頼むことにした。

「こつちもアドニスを」

バーテンに言った。バーテンはそれを聞くとにこりと笑った。そして頷いてくれた。

「畏まりました」

「頼むよ」

「私が頼んだからかしら」

女はそれを見て笑った。その目が退廃的に曲がる。

「まあね」

俺は素っ気無い様子でそれに頷いてみせた。

「元々好きなカクテルだしね」

「そうなの」

「シェリーは好きでね」

「合うわね」

女はそれを聞くとさらに笑った。

「私もそうよ」

「それはまた」

「じゃあ今夜は飲もうかしら」

「それで退屈を紛らわせる」

「ええ」

ここでアドニスが運ばれてきた。それで乾杯をする。

「退屈は嫌いなものよ」

女は乾杯の後でこう言った。後ろからジャズの曲がゆったりとしたテンポで聴こえてくる。

「ただ時間が流れていくだけなのは」

「そんなことは忘れてしまいたい」

「そうよ」

その赤い唇にその赤いカクテルを近付ける。そして口に含んだ。

「それだけはね。許して欲しいわ」

「どんな事情があるのかはわからないけれど」

俺もカクテルを口に含んだ。それから言った。

「そんなに退屈が嫌なら付き合うよ。今夜はね」

「今夜だけなの？」

「退屈を紛らわせたいだけなら」

俺は乾いた言葉を出した。

「一夜だけの方がいいだろ？お互いにね」

「それもそうね」

女もそれに頷いた。賛成してくれたらしい。その時女の吐息が俺にあたった。アドニスの香りの他にもう一つ香りがあった。

それはムスクだった。身体からもその香りが漂う。だが口からはより強い香りがした。どうやら口の中にもムスクの香玉を入れているらしい。これははじめてだった。

その香りが俺の心を誘った。今夜はこの女と一緒にいたいと心から思うようになった。ムスクの香りが俺を誘っていた。

「俺も寂しいしね」

俺は言ってしまった。ムスクに本心を出させられてしまった。

「あら、貴方も」

「今は一人身でね。寂しいものさ」

「私もよ」

女は自分もそうだと云った。だが俺はそれは信じなかった。

「嘘だね」

俺はこう言ってやった。

「何でそう言えるのかしら」

「その指さ」

俺は彼女の左手の薬指を指差して言った。

「その指輪を見ればね」

「今は違うわ」

だが女はこう言って不思議な笑みを浮かべてきた。

「違う？何が？」

俺はからかってやった。アバンチュールなら望むところだがこうして突付くのもいいものだ。

「今は誰もいないわ」

「今は、ね」

「そうよ。だからここにいるのよ」

どんな事情があるのか。だがそんなことは俺には関係はない。気がつけば俺も女もアドニスを飲んでしまっていた。女はそれを見てまたバーテンに声をかけた。

「フローズンベリーを。二つね」

「わかりました」

「今度はウォッカなんだね」

「強いお酒の方がいいでしょ？」

女は頼んだ後で俺に問うてきた。

「退屈を忘れるのには」

「今夜のこれからも考えるとね」

俺も悪戯っぽく笑って返した。

「強いお酒の方がいいわよね」

木苺とレモンジュースを入れたカクテルだ。甘口で飲み易い。どうやらこうした赤くて酔いの早い酒が好きなようだ。

「それじゃあまた飲みましょう」

「うん」

ここで女は髪を掻き分けた。左耳が見える。そこにある金色のピアスがステンドガラスの光を反射する。そしてガラスの赤い酒の光は彼女の白い顔を照らしていた。

それから暫く飲んだ。気がつくと俺はホテルのベッドの中にいた。安いラブホテルじゃなかった。名前には聞いたことがあるがとても俺なんかが泊まれるようなホテルじゃない。正直ベッドの中で俺は驚きを隠せないでいた。

「驚いたかしら」

隣にはあの女がいた。身体をシートで隠して俺に尋ねてきていた。

「驚くも何もね」

俺は煙草を啜えながら言った。

「まさか。こんなホテルに泊まるだなんて」

「あら、大したことはないわよ」

女はくすりと笑ってこう返してきた。

「こんなホテルなんか」

「こなね」

それに応えながら火を点けた。そして煙を吐き出す。

「お金持ちだったとはね」

「お金だけ持ってたもね」

女の笑みが寂しげなものになった。

「何もならないのよ」

「どうだか」

俺にはわからない話だった。こっちは毎日必死に働いて金を稼いでいる。生きる為には何だってしなきゃならない身の上だ。そんな人間にはわからない話だった。

第二章

「少なくとも財布は豊かになるぜ」

「お財布だけ豊かになっても仕方ないのよ」

「またつれない御言葉」

「一人だと。色々と寂しいのよ」

「嘘だね」

だが俺はその言葉を否定してみせた。

「一人ってのは」

「づしてそう言えるのかしら」

「俺だって世の中を知らないわけじゃないさ」

そう言って彼女の左手を手を取った。

「この指輪がね」

「指輪がどうしたのかしら」

それでも女はしらばっくれていた。そういうふうに見えた。

「あんた結婚してるんだろ」

俺は言ってやった。

「この薬指の指輪が何よりの証拠さ」

「あら、面白いことを言うわね」

それでも女はしれっとしていた。

「どうやら世の中のことを知らないのは貴方みたいね」

「そりやどういことだい？」

「指輪なんてね。永遠の誓いじゃないのよ」

「浮気を認めるのかい？」

「浮気をした相手がまだいればね」

女の顔が寂しくなった。

「？」

俺はそれを聞いて何が何かわからなくなった。

「何なんだ、一体」

「わからないかしら。浮気されたって認める相手がもういないのよ」
「それってまさか」

俺にも大体事情がわかってきた。複雑な事情ってやつだ。
「主人は。もういないわ」

やはりそうだった。旦那さんに先立たれちゃったのだ。

「歳は離れていたけれど。いい人だったわ」

「それはまた」

まずいことを聞いちゃった。そう思ったが顔には出せなかった。

「一年前に。交通事故で」

「それで一人になっちゃったんだな」

「ええ」

女はこくりと頷いた。

「それから。広い家に一人で」

語るその顔がさらに寂しげなものになった。

「それで。時間がただ過ぎていくだけで」

「俺と寝たわけか」

「そうよ。それに貴方が似ていたから」

「死んだ旦那さんに？」

「歳は離れていたけれど。後ろ姿や横顔が」

「また奇遇なことだね」

「お酒も。あの人が好きだったのを」

「つまりあれか」

俺は言った。

「俺はその死んだ旦那さんのかわりだったわけか」

「否定はしないわ」

やっぱり返事はこれだった。

「どうしても。忘れられなかったから」

「一夜だけでわけか」

「ええ」

彼女は頷いた。

「だから。また」

そして俺に身体を寄せてきた。またムスクの香りが俺を包む。

「思い出させて」

「わかったよ」

どうやら俺は雇われらしい。一夜限りの恋人だ。

だがそれでいいとこの時は思った。普段の俺ならお断りといったところだがこの時は別だった。ウオッカの酔いとムスクの香りが俺をそうした気分にした。その香に乗って俺も彼女を抱いた。

「じゃあ思い出させてやるさ」

シーツの中で覆い被さった。

「昼は淑女でも夜は娼婦」

ふとこの言葉が頭に浮かんだ。

「女ってのはわからないものだね」

その夜女は俺の腕の中で乱れた。そして二人で一夜を過ごした。それがこの夜での出来事だった。俺はその死んだ旦那さんのかわりになってやった。女の方もそれで納得したようだった。

朝になった。目が覚めるともう隣には誰もいなかった。

「行っちゃったのか」

俺は空になったベッドの隣を見て呟いた。

「自分勝手なことだな」

苦笑したが悪い気はしなかった。俺も久し振りに満足していたからだ。

見れば枕元に書置きがあった。綺麗な女の字だった。彼女のものであるのは言うまでもなかった。

『有り難う』

まずは御礼が書いてあった。

『昨夜は。一夜だけだったけれど』

「元々それが望みだったんだろ」

俺は手紙を読みながらそう呟いた。

『さようなら。身体も心も熱いうちに』

どうやらあちらも満足してくれたらしい。

『探さないから』

それで終わりだった。本当に一夜限りの恋人だった。

「たまにはこんなのもいいか」

俺は手紙を読み終えてこう呟きながらベッドを出た。そしてシャワーを浴びて服を着た。

「朝帰りとか言われるかな」

服が同じなので会社での声が少し気になったがそれでも満足はしていた。ホテルの金も払ってくれていた。俺は気持ちよくホテルを後にした。けれどこの時思った。

「またこんなことになればいいな」

夢だ。本当に夢の話だ。けれどこんな甘い世界に入られるのならもう一度は入りたいものだと思うた。そしてそれは現実のものになっちまった。

それから一週間後のことだ。仕事帰りにまたあの店に行こうと思った。酒を飲む為だったが同時にまたあの女に会えればいいと思っただからだ。

「いるかな」

俺はそう思っていた。

「いれればいいな」

まあそうそういるものでもないと思っていた。上手い話は簡単に転がっているものじゃない。それに向こうもいつもそこにいるわけじゃない。俺だって他の店に行く。一夜限りだからといって話もある。俺もそれは頭でわかっていた。だが心と身体はそうじゃなかった。また甘い世界に入りたいと思っていた。

夜のアスファルトを歩いていた。すると後ろからクラクションが鳴った。

「おいおい、歩道はちゃんと歩いてるぜ」

俺は振り返ってこう言った。振り返った先には白いスポーツカーがあった。ランボルギーニだった。

「またこれは」

しかもディアブロだった。こんな夜道で見られる車じゃない。思わず口笛を吹いた。

「やっぱり貴方ね」

その中から聞いたことのある声が聞こえてきた。窓が開くとそこからあの女が出て来た。そして俺の隣までやって来た。

「あんただったのか」

「また夜の街に行こうと思って」

「車で？」

俺は意地悪く笑ってこう尋ねた。

「今日は踊るつもりだったのよ」

「本当かね」

「そうよ。けれど気分が変わったわ」

女も笑った。媚びる様な、そして誘う様な笑みだった。最初に会った時と同じ笑みだった。

「今日も。貴方と一緒にいようかしら」

「あの夜だけじゃなかったのかい？」

「気が変わったのよ」

何とも気紛れなことだ。

「今日も。いいかしら」

「お望みとあればね」

けれど悪い気はしない。俺もそれでよかった。

こっちでも会いたいと思っていたところだ。丁度いいと言えば丁度いい。俺は顔を近付けて尋ねた。

「そして奥様」

「はい」

またムスクの香りが漂ってきた。本当にこの香りが好きらしい。

俺も好きになってきた。

「今夜は何をして遊ばれますか？」

「そうね」

彼女は妖艶な笑みになってから俺に言葉を返してきた。

「まずは乾杯といきたいわね」

そしてボトルを一本差し出してきた。

「どうかしら」

「お望みとあらば」

俺はそれを受け取った。見ればコルクじゃない。ストレートのウオッカだった。

「ダンスでも何でも」

「今夜も離さないから」

「旦那さんのかわりに？」

「最初はそうだったけれど」

俺はウオッカを口に入れた。そしてそれをそのまま飲む。酒の強いには自信がある。あつという間に半分あけてしまった。

だが結構きた。やはりウオッカはきく。ウオッカにしてはそんなに強いやつじゃなかったがウオッカはウオッカだった。思えば無茶をやっちまった。

「今は違うわ」

「じゃあ恋人？」

「ジゴロね」

その半分なくなったボトルを見ながら言う。ボトルのガラスが夜の街の光を照らしていた。そして様々な色で輝いていた。

「ジゴロ？」

俺はシニカルに笑いながらそれに返した。

「またそれは手厳しい」

「嫌かしら。だったら言い方を変えるけれど」

「まあいいさ」

けれどそれでいいって言った。どっちにしろ歳も金もそっちの方が上だ。だったらそれに徹するのもまた一興だ。

「それでね」

「じゃあ付き合って」

「かしこまりました、奥様」

そう言って右側の座席に向かった。そしてそこに入った。

「おおせのままに」

「それじゃあ行くわよ。ところでウォッカだけれど」

「それが何か？」

「その半分は勿論私のよね」

「そうだけれど？」

俺は答えた。

「そう。だったらいいわ」

彼女はそれを聞いて満足そうに頷いた。

「半分は私のもの。貴方もね」

また妖しく笑うと足に力を入れた。スリットが深く入ったドレスから綺麗な白い脚が見える。実に艶かしかった。大人の女の脚だった。

その艶かしい大人の脚でランボルギーニのエンジンにアクセルが加えられた。そして走りはじめた。

こうして俺達はまた夜の街に入った。また一夜だけの恋人になる。都会の洒落た恋。だがそれは行き摺りの束の間の恋だ。けれどだからこそ楽しい。頹廃に溺れてみるのもいいものだ。

ワンナイト＝ジゴロ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0044b/>

ワンナイト = ジゴロ

2010年10月8日15時44分発行